

「日中相互イメージの交錯」の特集にあたって

編集部

今年の日中戦争の終結から六十年。人間でいえば還暦である。日中国交正常化はほぼその中間点での出来事であった。この節目にあたる年に起きた中国各都市の反日デモは、日中関係が重大な岐路にさしかかっていることを、日双方の国民に目に見えるかたちで知らせることになったに違いない。この数年、日中関係はしばしば「政治経熱」と表現されてきたが、小泉首相の靖国神社参拝への固執や歴史教科書問題に加え、サッカー・アジアカップの騒動や潜水艦の領海侵犯事件など、互いの国民感情を互いにかきむしりあうような事件が相次いで起こり、好調な日中経済関係への悪影響、すなわち「経冷」への転化も懸念され始めていた矢先のことであった（新幹線導入問題はその象徴である）。デモは起こるべくして起きたとも言える。

だが、「政治経熱」とは日中関係の複雑な現状を的確に言い表すにはあまりに言葉足らずである。とりわけ、両国の「民」が、お互いに対して抱いている感情やイメージの領域がこれには欠落している。政治指導者が「民」の意向に敏

感に反応せざるをえなくなったのは、本特集の座談会でも話題になつていくように、日中双方に共通する現象である。双方の「民嫌」状況は、いまや「政治」のままでは済まされない現実を生み出していると言つてよいだろう。

本特集はこうした現実的関心から出発し、次のような課題にアプローチしようとするものである。すなわち、日中両国の「民」はお互いに対しどのようなイメージを抱いているか。また、それは何を素材として、どのように形成されているか。そして、それはどのような変遷を辿ってきたか。――収録された各論文の配列は、最後の二編を除き、執筆者のナショナルリテイによって観点が大きく規定される本特集のテーマを考慮して、日本人執筆者と中国人執筆者とに二分した。ただし、論述の対象は、一方の他方に対するイメージには限定されておらず、自己イメージの形成を扱ったもの（劉建輝論文）や、他者の他者自身に対する認識を組上に載せたもの（陳雲論文）もあり、本特集のなかでも文字通り「イメージの交錯」が展開されている。それ

らを比較対照しつつ読んでいただければ、日中関係においては、双方の互いに対するイメージが、たんに一方的な思い込みやイデオロギーに規定されたものではなく、互いに影響を与え合う不可分の関係性のなかで構成されていることをうかがい知ることができるであろう。

たとえば、伊藤一彦と陳雲の両論文は戦後の日本について、それぞれ対中国イメージと日本自身の自己イメージを扱っている。前者は戦後の日中関係の展開および中国自身の変動によって日本人の対中国イメージがいかに変動したかを分析し、とくに近年の対中「好感度」の低下を、天安門事件や江沢民主席の対日強硬姿勢などの要因から説明している。これに対し後者は、戦後日本が高度成長の中で侵略の歴史に対する責任を忘却した過程を描き、日本国民に責任の自覚を迫るには中国からの「外圧」も必要だと主張する。鋭い対立を潜在させた二つの議論だが、そのぶんイメージの相互関連性は浮き彫りになるだろう。

高井潔司と渡辺浩平の両論文は、ともに最近の中国で日本イメージが作用している「現場」を扱っている。高井論文は中国の新聞における日本報道においてステレオタイプ日本のイメージがどのように再生産されているかを明らかにし、渡辺論文ではそうしたステレオタイプ化された日本イメージを植えつけられた中国の消費者が、日本の製品・サービスに対しどのような評価・行動を示すか、また日系企

業はそれにいかに対応すべきかを論じている。これに対し、劉星論文は、公的メディアとは対抗的な言論を掲示するウェブサイトの対日観(論)を分析し、その生成の内部要因を分析しているが、ウェブ上の日本イメージは公的メディアのステレオタイプをさらに増幅したものと印象を受ける。

劉建輝と徐水の両論文は、清末の中国知識人が中国の自己イメージを形成しようとした際に、日本という要素が果たした役割に着目したものである。中国の近代ナショナリズムの発足にあたり、日本がたんに対抗者として存在しただけでないことが理解できるに違いない。

最後の丸川哲史と孫歌の両論文は、本特集の主題からはやや外れるが、「日中関係」という枠組みを離れて考えるヒントとして掲載した。丸川は、台湾ニューシネマを素材に、「外省人」という存在が「中華民族」の文脈から離れ独自のエスニシティとして析出される過程をたどりつつ、そこに冷戦Ⅱ内戦構造の深い影響を見出している。孫歌論文は、他者の文化への知的沈潜が、同時に自己の文化アイデンティティを流動化させ、再定義するひとつの方法であることを示唆している。イメージが現実の歪んだ鏡像である限り、さまざまな交流のなかで現実とのズレを修正していく努力はもとより欠かせないものである。それに加え、国民国家の枠組みを相対化する方向で、イメージがもたらす対立を克服する道もあるように思われる。

(砂山幸雄)